

第17回スタディーツアー 日誌

2018. 7.10～7.21

7月11日(水) 深夜ダッカの空港着。

ラジョンさんの運転で、タリクさんも迎えに来てくれている。2時ころ空港発。深夜なのに大型トラックが多く大渋滞。5時間以上かかって朝7時過ぎ、タリクさんのマンションに着く。

朝食は、美味しいマンゴー、100%果汁のパイナップルジュース、ポロタに卵焼きとダルスープ。

10:00 仮眠してワンドロップ小学校へ出発。道が荒れている。車の揺れが激しい。

・クラスごとに個人カードで名前を点呼(大西)。あいさつの言葉を交わす。

・授業を見て回りながら、大西さん、浅田さんらが折り紙や歌などで子どもたちと心を通わせている。

岡さんは生徒60人の名前をほとんど覚えている。点呼の時、顔と名前を確認しながらあいさつを交わしている、すごい。

・あちこちのクラスで「かえるのうた」「てをたたきましょう」の歌声が大きく響きわたっている。

11:45 午前中3校時のあとランチ。ビスケット一袋だけではかわいそう。日本語教室の指導に行っている(大西・浅田)加西市マルナカ製菓のワッフル一個ずつをプラスしてあげる。ワッフルは生まれてはじめて見るお菓子。食わずに大事そうに持って帰る子もいる。



13:45 6校時

クラス3で体育の授業。岡さんが入って、日本の昔からの遊び、ボール投げ、ボール蹴りをする。むし暑い中、ぼくは動くのもだるいのに、子どもたちは元気にやっている。

岡さんは、子どもの心の中にずっと飛び込んでいく。ぼくは一步も二歩も身を引いて子どもたちととけ込めない。

クラス1は生徒移動なし。クラス2、クラス3は2、3人の変動あり。1年はいいとしても、2年、3年に途中転入は受け入れない方がよさそうだ。

14:30 放課後、<先生らとミーティング>。先生らの要望を聞く。



・教室が暑い(夏場6か月)。天井に扇風機をつけてほしい。

・パンツが汚れてボロボロになっている。私服で来ている子もいる。補充してほしい。

・3年生にボールペンがほしい。

Bangladeshでは上級学年はボールペンを使うらしい。今回すぐにボールペンを渡したが、生徒はやっぱり鉛筆がいいだろう。

<ワンドロップ小学校のランチ>

自前でカレーを作ったら安い費用でお腹がいっぱいになるランチができると、ずっと考えていた。今回16日(火)に一回だけカレーのランチを手作りしようと考えていた。60食分を作る本番の前に、試しに13日(金)、コミッタの奨学生が集まるので、その子らの分のカレーを作ってみようという作戦を立てた。炎天下、グランド脇に鍬で掘ってレンガを積み、かまどを二つ作る。作ることは作ったが、

学校でカレー作りをしていたら、周辺からたくさん人が集まってきて收拾がつかなくなるからダメということになった。タリクさん事務所で作って学校へ運ぶことも考えたが、この案も途中で尻切れのまま終わった。

13日、コミッラの奨学生にはカレーなし。結局16日に予定していた60人分のカレー作りもやめて、ビリヤニを購入して食べることになった。

18:00 タリクさんのマンションで美味しい料理。魚のカレー、空芯菜の和え物、ダルスープなど、半年ぶりにルニさんの料理をいただく。

タリクさんが新しい事業をスタートさせている。プロパンガスのガススタンドが建設中だ。ワンドロップ小学校の近くでは、林を切り拓いて堆肥作りをしている。炎天下、5~6人の女性が黙々と働いている。裸足の足で踏みつけながら牛糞と何かを混ぜている。乾燥させたものはザルに入れて頭上に乗せて運んでいる。頭が下がる。



7月12日(木)

7:30 出発

8:30 小学校到着。朝の会を参観。

リーダーの生徒が60人を前にして指揮をとっている。動きは子どもっぽいがよく整っている。国歌は、歌詞がタゴールの詩で良いらしいが、メロディが単調で長すぎる。それでも子どもたちはよく歌っている。子どもたちには、国歌を歌わせるより、バングラデシュで昔ながらに歌い継がれているやさしい歌を、いいメロディで歌ってほしい。軍隊式の挙手などの動作も、子どもたちには好ましくないと思う。

<校時>

1限 9:30~10:15 / 2限 10:15~11:00

3限 11:00~11:45 / ランチ 11:45~12:15

4限 12:15~13:00 / 5限 13:00~13:45

6限 13:45~14:30

クラス1・クラス2は、4限まで。クラス3は、6限まで。

(学習が遅れている子には、4限に補充授業)

先生らのカリキュラムにあわせて、大西さんが英語のあいさつの仕方や、曜日、月の英語を教える。浅田さんは、算数で百ます計算の方法を取り入れてベンガル数字で教える。竹ひごを10本、20本提示しておいて、そのうち何本かを子どもに抜き取らせてかぞえ、残りの竹ひごは教師が体の後ろに隠して、それが何本かを生徒に当てさせる。子どもらは具体的なものを目にしてよく数を答えられている。

岡さんはスポーツ。ボールを投げ上げて、落ちてくるまでに何回手をたたいて受けとれるか。岡さんは覚えたてのベンガル数字でかぞえて子どもの心を引き付けている。4回、5回もたたける子がいる。

「かえるのうた」「てをたたきましょう」子どもたちの歌声は、教室が割れんばかりに学校中に響きわたって楽しいが、子どもたちにはバングラデシュの歌をうたう方がいいかもしれない。先生らもバングラデシュの歌をうたいたすと声量も大きく、音程もしっかり、リズム感もばっちり。やっぱり、自分の生まれ育ったなかで歌われてきた歌を基本にした方がいい。

<先生との協議>

- 自分の名前が書けない子が2〜3人いる。その子のケアをしてほしい。
- 足し算ができない子もいる。百ます計算の方法はとて面白いと実証されている。毎時間のはじめに5分〜10分、どの学年でもやってほしい。
- 途中入学の生徒は、ルールを教えられないままに入ってくる。集団を乱すおそれがあるので心配。2、3年生は途中入学を認めない。
- 2階の空き教室の壁一面に大きな落書きがある。隣の教室の3年生のだれかが描いたものと思われる。書いた者をHRクラスで申し出させて注意する。落書きを許してしまうと、落書きしてもいいという雰囲気になって乱れる。

ということは分かるけど、その落書きは、大きな魚がゆったりと空を泳いでいるような楽しい絵とぼくは感じていた。が、みんなはただのつまらない落書きだと言うので、ぼくは何も言わないことにした。教室のまっさらの白い壁に落書きするのは良くないに決まっているが、壁面を飾る芸術的な絵画があるのは楽しい。京都大学の汚い？タテ看も撤去して欲しくない、と大学闘争の時代を過ごしたぼくは思うけどこれも言わない（笑）。

○クラス1は、赤と緑のプラスチックの机と椅子。1月には上級生がみんなですくはきれいにしたが、汚れっぱなし。教室の中や廊下、靴の並べ方など、指示されたものはそれなりにきれいにできている。けど、バングラデシュでは、自分の身のまわりはきれいにするが、一歩外は汚れて平気。だから教室の裏やグラウンドの周囲にはゴミを捨てても平気。先生もそんな風である。



○机の上にバッグを置き、その上で教科書やノートを広げている。バッグは机の上に置かない。S字フックをつけてバッグをかけることを考えたが、タリクさんの意見で却下。相変わらず机の上にバッグを置き、その上でノートをとっている。椅子の横にぶら下げるとか、机の両側にある窪みにバッグを入れて、机の上を広く使うようにさせたい。

15:30 タリクさん事務所からの帰り道、ラジョンさん運転のピックアップ車の荷台に乗る。初体験。大西、岡、山中。変な外国人が乗っている。好奇の目で見られる。女性がイスラムの国で不謹慎だと思われるところだけど、みんな笑顔を返してくれる。日本人だと分かって声をかけてくる者もいる。カメラで写真を撮ってくれと合図してくる人もいる。日本では絶対にできない経験だ。楽しかった。

18:30 夕食

浅田さんと岡さんが日本食をふるまう。サンドイッチとエビチリソース、鶏肉のカツ。

7月13日(金)

朝食は、魚のから揚げ（高価な白身魚で美味しい）、瓜のスープ。とても健康的な食事だ。ジャックフルーツの種を焼いたものが香ばしい。夏のスタディーツアーでは、マンゴーとジャックフルーツは食べ放題（笑）

午前中タリクさんの家で、コミッタのスカラーシップの子らに鶏肉のから揚げを準備する。（美味しいが、バングラデシュの人たちにははじめての食べ物で、どうやって食べたらいいか分からなくて戸惑っていた。）

15:00 ワンドロップ小学校でスカラシップの子らと親に会う。

生徒と保護者が一緒になって切り絵を作り、モビールにする。お父さん、お母さんが自分の子どもが作ったモビールを見せて誇らしげにしているのがよかった。自分の子どもそっちのけで切り絵を楽しんでいるのも、とてもよかった。

夕食 以前にも連れて行ってもらったことのある店。焼き鳥の煙と匂いが充満していてにぎやかな店。カシューナッツのサラダがとても美味しかった。



7月14日(土)

ワンドロップ小学校。

- ・ハンドベルで「かえるのうた」
- ・アルファベットの文字盤で自分の名前を書く
- ・ベンガル数字で百ます計算。

大西・浅田・岡さんら、みんなすごく積極的に子どもらの中に入って行く。引き気味のぼくは、クラス2で紙飛行機を作る。外に出て飛ばしあう。よく楽しんでくれてホッとする。

5校時 補充クラス。

算数ができない子、名前が書けない子らを残して別勉。先生も熱心で、子どもらも喜んで勉強している。残らなくてもいい子らが、何かの口実を考えて、学校から帰りたくなさそうにしている。みんな、家にいるよりも、学校にいるのがうれしいのだ。

6校時 クラス3授業担当になっている先生以外の3人と意見交換。

○折り紙や切り絵の練習。○ハンドベルの練習。

○アルファベット盤などの教材、教具の使い方を説明する。



17:30 タリクさん事務所からの帰り道、ラジョンさん運転のピックアップ車の荷台に岡さんと乗る。ビュンビュン飛ばしてスリル満点。市内の大渋滞の中で荷台に乗っているのはさらし者みたいに、たくさんの目にさらされて気恥ずかしいが、バングラデシュの人たちは、やさしい笑顔を向けてくれる。



<夜、ひとり考える>

ぼくは言葉が分からない。わかろうとしない。生徒の名前が分からない。覚えようとする。だから、子どもたちの心に近づけない。先生らともしゃべれないから、先生らのことも見えてこない。

カメラで一人ひとりの顔を見るが、ファインダー越しではお互いの心がつながらない。見える範囲も限られて周りとの関係が切れている。

大西さん、浅田さん、岡さんらが子どもたちのそばに近づいて言葉かけをし、関係を作っている。だから、子どもたちのことも見えてくるのだろう。ぼくは何回来てもなかなか関係が深まらないし、子どもたちのことも見えてこない。

ぼくの役割は文房具運びと写真撮影でいいと決め込んでいるが、来るたびに自分のダメなところを思い知らされて嫌になる。

7月15日(月)

・浅田さんが準備した貼り絵がとてもよかった。

・体重測定。食べるものが十分になくやせ細っている子が何人かいる。子どもの健康を見るには身長より体重が大事、ということで計る。みんなやせ細って見えるけど、1キロか、500グラム減の子が何人かいるぐらいで、半年前より極端に減っている子はいなかった。

・6校時の3年生。モビール作りはおもにぼくの担当だったが、段取りが悪くてドタバタだった。

浅田さんが、線対称の構図で切り絵の指導をしてくれた。できた切り絵をひもで竹ひごに吊るしてモビールにする。3年生になると、ハサミの使い方がとても上手になっている。

ぼくは、しゃべれなくて子どもらになかなか声かけできないが、一緒に何かやっていると、子どもらの方から「セロテープをくれ!」「切り絵の型を書いてくれ!」と寄ってくる。「ヤマナカ、ヤマナカ」と呼び捨てでわがまま言っているみたいだけど、考えてみたら心を閉ざしているのはぼくの方で、子どもらの方からぼくの心を開いてくれているのだった。

ランチ前に、ヤスミンさんが伊藤さん、山村さんと一緒に学校に到着。

ヤスミンさんが教室に入ると、それだけで子どもたちの表情が変わり、みんなの心がヤスミンさんにひき付けられていく感じがする。



7月16日(火)

今日のランチは手作りカレーはあきらめて、購入してきてもらったピリヤニだ。生徒にお腹いっぱい美味しいごはんを食べさせてあげよう。子どもらには食べきれないほどたくさんの分量だったけど、残った分はパックに詰めて持ち帰る。少しずつでも家族と分け合って食べられただろうか。

6校時、クラス3で紙ヒコーキと似顔絵画き。

友だちどうし向き合ってお互いの顔を描く。たがいに見つめ合って照れ笑いをしているのがほほえましい。プリントしておいた個人写真を見ながら自分の顔も描く。前回いなくて写真のない子は、大西さんやぼくの顔を見て描いてくれる。

描いた自画像は、ひとりずつ前に出てきて見せあう。ちょっと変になった絵に、クラスのみんも本人も大笑い。照れて笑いがはじけるのがほほえましい。

<サラリーアップの労使交渉!?!>

先生ら4人が連名で賃上げ要求書を提出。

昔は教職員組合で労働者側だったぼくとしては、こんな小さな村の学校で、たった4人で賃上げ闘争をするのがほほえましかった。どちらかと言えば今は経営者側で労働者の要求を抑え込まなければならない立場なのだけど。

タリクさんの印象では、先生らは500タカアップでも納得しないだろうということだった。200タカに抑えたいところだけど、300タカのアップに譲って、それでも嫌なら辞められても仕方ないと



いう判断に決めた。



実は、その前日、先生の一人が自分の娘をスカラシップにしてくれと申し出たばかりだった。来年一月から一か月 1,000 タカで支援してくれる人を探してみる、という話になったばかり。それなのにその先生が率先して賃上げ要求の声を上げている。

ぼくら日本人は、バザーでカレーを売ったり募金を募ったりしてボランティアとして頑張っているのだから、先生らも労働者という面だけでなく、ボランティアとして頑張るといふ気持ちがあってもいいのでは、という考え方ができるかもしれないが、彼らにボランティア精神を要求するのはダメだと思う。

きびしい経営状態だから少しでもサラリーは抑制したいところだが、労働者としての生活保障の要求には正当に応えなければ、とぼくは勝手なことを考えている。

7月17日 (火)

ランチの時間をめどにダッカへ移動する予定。

9：30 学校着

11：30 3校時の途中から4人の先生らは授業を抜けて、賃上げ要求交渉。ヤスミンさんが同席して大西さんがつらい立場で答える側。

その間、1年は浅田さん、2年は岡さん、3年は伊藤さんがそれぞれ教室で「ボール投げ遊び」「立ちずもう」「歌」「シャボン玉飛ばし」の遊びなどをして過ごす。

ぼくらが子どもたちと楽しんでいる間、大西さんが一人頑張って交渉に臨んでくれる。15分の話合いの予定が30分以上。ランチタイムにまでずれ込んで、ぼくらが先生に代わってランチの指導。4校時の授業が始まる12時15分を過ぎても終わらない。先生が教室に来るのを子どもらが待っているときに、ぼくらはワンドロップ小学校の子どもらとバイバイしなければならない。あたふたと帰り始めるぼくらを、子どもたちは廊下に出てきて「アバール デカホベ！！」手を振って見えなくなるまで見送ってくれる。

この子らの楽しい学校生活は変わりなく続けられなければ、かわいそうだ。

賃上げ交渉の最終提示額は、7月から月額300タカのベースアップと、年2回のボーナス（月額をイード月の2回）支給。

子どもたちと別れてダッカへ移動。

ホテルで休んだ後、友人のアニカさん宅を訪問。1月のスタデイツアーのとき結婚式に招待された。盛大な結婚式の写真は、プロのカメラマンによる2,000枚以上。写真の新郎新婦は、映画のワンシーンの俳優みたい。



7月18日 (水)

7：30 ホテル出発 渋滞もあり、2時間かかってヤスミンさんのナワブゴンジュの村に着く。

13：00 小学校訪問。

併設されている高校には奨学生のノヨンやシマントくんらが通っている。

大歓迎を受ける。何か分からないままに、日本からの訪問団として校門前で記念植樹もさせられる。

今回はパフォーマンスはなしで、バングラデシュの学校ではどんな授業をしているかを見せてもらうだけ。文房具も先生から配ってもらうことにしていた。ところが、教室を回り始めたら鉛筆を一人ひとり手渡すことになり、日本の歌や手あそびなど、子どもたちを巻き込んで楽しむことになった。



この学校は、いい先生がいて、よい教育が行われているということだった。女性校長はやさしい表情のなかにもしっかりとした教育理念をもっている人のように感じた。先生らも明るく笑顔いっぱい、いきいきと教育活動に取り組んでいるという印象だった。

こんな教育現場を、ワンドロップ小学校の先生らが参観して研修できたらいいのにと考えた。

バングラデシュでは、先生になるためには1年間、教授法などの勉強をしたうえで、半年の教育実習をするそうだ。ワンドロップ小学校の先生らは、教員資格がなくて指導力に不十分な面がいっぱいあるようだけど、考えてみたら、先生になってその力量を高めていくためのチャンスがない。1年に2回のスタディーツアーで日本の教授法などを紹介しているが、とても十分とはいえない。

本来なら、授業研究のために他校を訪問するなどの研修の機会があってもいい。研修費は支給する。研修の出張で抜けたときのために臨時的教員を雇っておく。

ワンドロップの体制では絶対に無理なことだけど、先生のスキルアップには必要なことだ。また、学校には力量のある先輩教師の指導も必要だ。たとえばヤスミンさんのような先生がいつも学校にいて、先生を育てるといのができたらいい。けど、それは無理。無理だけど、今の先生らの力量不足を補い、高めることができる教育条件は可能な限り整えていかなければならないと思う。



ランチはヤスミンさんの家。タリクさんの家の料理も美味しいが、ここの料理は抜群に美味しい！

14:30 ヤスミンさんの村の奨学生に会う。

ノヨンくん、シマントくんが先輩リーダーとして、とてもしっかり後輩の面倒を見ている感じで頼もしい。

奨学生の面接をしている間、折り紙で手裏剣を作って遊ぶ。みんな熱中して楽しんだ。

18:30 ダッカの日本語クラス訪問。

何の許可も取らず、部外者が大学に侵入したことになるのだと後で気づいたが、先生も学生も大歓迎してくれた。自己紹介、日本の歌、折り紙で鶴作りなどを楽しむ。学生らは直に日本人と出会うのは初めて。自撮りで一緒に写ってくれと年寄りのぼくも引っ張りだこ！

7月19日(木)

9:00 ぼくが支援しているフマヤンにホテルで会う。

半年ぶり。少しスリムになったようだけど精悍。不合格だったSSC数学の試験に今回も失敗。彼が今どのように考えているか聞かせてくれるよう通訳(ホテルの人)してもらう。

これ以上支援は続けられないと決めていたが、もしかして彼がさらにもう一回挑戦したい、そのため



に支援を続けてほしいと言ったらどうしよう。軟弱な精神のぼくは迷いもあった。

彼の説明。二度目のテストは卒業した高校の先生に受験手続を任せていた。何かの手違いで受験番号が不明のまま受験して、成績を評価してもらえなかった。提出した答案はどうなってしまったのか。高校の校長と一緒に教育委員会に行って事情を説明したが、受験番号が不明の答案ではどうしようもない。答案用紙も見当たらないので判断のしようがない、とのこと。

現役生徒の場合は、学校の先生に受験手続きをしてもらってもいいが、過年度卒なので先生任せにせず、自分で手続きをしなければ。

彼の話によると非常に悔やまれる経過だが、彼はそのことをどう考えているのか。いつ会っても彼は口数が少なく、自分の考えをはっきりとは言わない。しかし、彼は自分で決心していた。もう一度チャレンジしたいが、それは自分自身の力でやる、と。彼自身の口から決心を聞いて涙が出た。

昨夜、フマヤンに会ったらどう言おうか、ベンガル語はもちろん英語でしゃべることもできない。スマホの翻訳機能を使ってぼくの考えを英文にしておくことにした。

「三度のチャンスまで支援するのは無理。進学はあきらめて働くしかない。働きながらも勉強する意欲を忘れずに、何か資格でも取って将来の人生を前向きに歩んでほしい。」と書いた。

「支援はストップすることになる」と通訳してもらったあと、もう彼の決心も聞いているのだから手紙文は意味をなさないけど、手紙文を読んで通訳してもらった。

自分の気持ちを文章にして読むなんて、まるで国会議員かどこかの会社の社長が過ちを犯した時にテレビを前にして謝罪文を棒読みするのと同じではないか。そんな心ないことを自分でもしている、と思いつつも読んでいくうちにこみ上げるものがある、言葉につまった。お恥ずかしい！

「毎年2回、バングラデシュに来るから、その時にまた会おう！」と言ってしまっていた（笑）

10:00 伊藤さん、帰る。ホテルで別れる。

16:00 ヤスミンさんと一緒にシアタースクールに行く。

スカラシップの子ら12人に会う（1人欠席）。

ぼくの支援者ポーリーはいつも表情があいまいで、笑顔もすくなく、視線も集中しないことが多い。ずっと気がかりだったが、今回見た彼女は笑顔があふれていた。

奨学生一人ひとりと大西さんが面談している間、ぼくらは折り紙で箱を作ったり、だまし船を作ったりしてあそんだ。

折り方が分からなくて手が止まっている子がいる。浅田さんが「ヤマナカ、チェック！」と声をかけて、ぼくに教えてもらうよう仕向けてくれた。折り進めるたびに「ヤマナカ、チェック！」とみんなが大きな声で楽しく声かけしてくれた。

女生徒は、指ずもう、腕ずもうも恥ずかしがらずに相手になってくれる。日常生活の中で身体が鍛えられているのか、女の子も手ごわい。指ずもうは負けてばかりだった。

ぼくは、これまでシアタークラスの子らにはちょっと溶け込めなかった。彼らの歌やダンスや劇などのパフォーマンスをすごいなあと観ているだけだった。今回彼らと一緒にあそんで、とても親しく感じる事ができた。

シアタースクールの奨学生のことにに関しては指導者二人のことで関係がぎくしゃくすることもあって、スタディーツアーでも一歩あいだを置い



てきた経緯もある。そして、奨学生の中には勉学の支援という本来の目的からはずれる者もいたりしたが、彼らの多くは、素直な気持ちで奨学金の支援を喜び、勉学にも、シアターの活動にも励んでいるのだ。

こちらの側から壁をとっばらって向き合ったら、大喜びで笑顔を返してくれる。ぼくはいつも、人に声かけするのが苦手、しゃべりができない、と心が固くなって身を引いているが、こうやって今回一緒に遊んでいるうちに、彼らの方から「ヤマナカ、チェック！」とからかい半分、声かけしてきてくれるのがうれしくてならなかった。

関係はお互いの開かれた心で深まると思いながらも、ぼくはやっぱりしゃべれない（笑）。

20:00 ホテルに帰ってジョニさん、奥さんのカディジャさん、美術家のアパラチタさん、ラジブさんと夕食会。ヤスミンさんの計らいでホテル6階の新しい部屋（将来はレストランになる）を用意してもらって歓談。バングラデシュ最後の夜を楽しく過ごした。

山中 勇